

インドネシア・バンテン遺跡出土の陶磁器

Ceramics from the Site of Banten in Indonesia

大橋康二・坂井 隆

- ①バンテン遺跡群調査の経緯
- ②バンテン遺跡群の概要
- ③バンテン遺跡出土の陶磁器

【論文要旨】

インドネシアのジャワ島西部に位置するバンテン遺跡は16世紀から18世紀にかけて栄えたイスラム教を奉ずるバンテン王国の都であった。1976年以来、インドネシア国立考古学センター（The National Research Center of Archaeology）などにより、この地域の発掘調査が続けられ、膨大な量の陶磁片が出土した。これを整理した結果、25,076個体を産地、年代、種類毎に分類し得た。主に16世紀から18世紀の陶磁器であることは、バンテン王国の栄えた時代と符合する。この間も時期毎で陶磁器の産地、種類の割合・内容が変わる。

I期（15世紀以前）の陶磁器はほとんどなく、II期（16世紀前半～中葉）になると、景德鎮磁器が少量出土するが全体に占める割合は1%とまだ少ない。

III期（16世紀末～17世紀前半）からV期（18世紀）の陶磁器は全体の89%を占め、バンテン王国の歴史を裏付けている。III期の中でも、1590年代以降の中国磁器が多く、この時期には景德鎮（35%）に加えて福建南部地方の磁器が加わり、45%を占めることになる。この頃、オランダ続いてイギリスもアジア貿易に参入した。

IV期（17世紀後半～18世紀初）には1644年以降の明清の王朝交替に伴う内乱で中国磁器の輸出が激減したため、肥前陶磁器の輸出が始まり、1683年までの間は中国磁器より量的に多いと思われる。1684年に貿易の禁止が解かれると再び中国磁器の輸出が盛んになる。

V期（18世紀）の前半は再び多量に輸出されるヨーロッパ向け景德鎮磁器に圧倒されながらも、肥前（有田）磁器の輸出は残る。景德鎮と肥前の製品はヨーロッパ向けが主であり、東南アジア向けの製品は福建・広東系磁器がIV期に引き続き主体である。

VI期（18世紀末～19世紀）の中でバンテンがオランダによって破壊された歴史を裏付けるように、中国磁器はこの時期の前半のものが少量見られるだけである。